

教科書から見る高等学校の古典教育

—『源氏物語』夕顔巻の扱いを対象として—

渡 橋 恭 子

The Treatment of Yugao in *The Tale of Genji* in Japanese High Schools as seen in Textbooks

Noriko ORIHASHI

要 約

高等学校古典の教科書では、『源氏物語』が多く収録されている。なかでも夕顔巻は、光源氏と夕顔との出会い、およびなにかしの院の怪異譚が印象深く、当該場面は多くの教科書に採録されている。

現在『源氏物語』夕顔巻が古典教育の場で用いられる際には、登場人物の心の動きを読み取らせることに焦点を当てた授業が展開されている。しかし、夕顔巻については古来より注釈書等でその背景に存する歴史的事実や伝承をもとにした准拠に焦点が当てられている。夕顔巻は、心情の読み取りに加え、史実や准拠についても配慮した読みをすることが可能な巻と考えられる。

実際に、古注釈書を用いて夕顔巻の光源氏と夕顔の出会いの場面について検討すると、夕顔は必ずしもはかない女性とはいえ、むしろたくましさをもって人世を渡っていった姿をみる事が可能となる。

そこで本稿では、高等学校古典の教科書にみられる『源氏物語』夕顔巻を検討対象として、特に光源氏と夕顔との出会いの場面およびなにかしの院にて怪異が起こり夕顔が亡くなる場面を取り上げ、古注釈書を援用しつつ、史実や准拠を授業における読解に含めることの意味について検討する。

キーワード：源氏物語、教科書、河海抄、夕顔、准拠

1. はじめに

高等学校古典の教科書では、『源氏物語』が多く収録される。巻ごとでは桐壺巻冒頭の採録数が最多であるが、なにかしの院の怪異譚が印象深い夕顔巻の採録数も高く、当該巻への関心の高さがうかがえる。

教科書に採録される『源氏物語』夕顔巻には、光源氏と夕顔との出会いの場面およびなにかしの院にて怪異が起こり夕顔が亡くなる場面の二種類が確認できる。前者の場面は、注釈書などでは「即物的なイメージの連鎖の間に散文詩的形態を備えて、余情豊かである。」⁽¹⁾と評されており、

後者の場面は、「怪奇を主題とし、それを周知の伝承と重ね合わせる、構想上の周到な布石は、写実的な情況描写と相まって、強い迫力を感じさせる。」⁽²⁾と評価されてきた。

しかし、小川満江氏⁽³⁾が夕顔巻を用いた授業実践の報告において、「周囲の状況などを説明し、源氏の心情や行動に関する箇所を中心に問いかけしつつ、内容把握をさせたい。」と述べるように、現在『源氏物語』夕顔巻が古典教育の場で用いられる際には、登場人物の心の動きを読み取らせることに焦点を当てた授業が展開されている。

確かに、夕顔巻は光源氏と夕顔の心情がダイナミックに描かれる箇所であり、こうした授業を展開するのにふさわしい巻であろう。しかし、夕顔巻については古来より注釈書等でその背景に存する歴史的事実や伝承をもとにした准拠に焦点が当てられている。夕顔巻は、心情の読み取りに加え、史実や准拠についても配慮した読みをすることが可能な巻と考えられる。

そこで本稿では、高等学校古典の教科書にみられる『源氏物語』夕顔巻を検討対象として、特に光源氏と夕顔との出会いの場面およびなごしの院にて怪異が起これ夕顔が亡くなる場面を取り上げ、史実や准拠を授業における読解に含めることの意味について検討する。

2、『源氏物語』夕顔巻の教科書への採録状況

まず、高等学校の古典の教科書が『源氏物語』を取り扱う際、いかなる巻が採録されているのかを確認する。以下、『源氏物語』を取り扱っている教科書を掲出し、採録されている巻名を表1に一覧する。

表1 『源氏物語』の取り扱いがある教科書

出版社名	教科書名	出版年月	取り扱い巻
東京書籍	古典1	平成14年2月	桐壺、若紫
	古典 古文編	平成20年2月	桐壺、若紫、葵、須磨、野分、若菜、御法
	新編古典	平成21年2月	桐壺、若紫
第一学習社	改訂版高等学校 古典 古文編	平成21年2月	桐壺、若紫
	改訂版高等学校 標準古典	平成21年2月	桐壺、夕顔、若紫、明石
	高等学校 古典講読 大鏡源氏物語史記	平成21年2月	桐壺、夕顔、若紫、葵、賢木、明石、総合、薄雲、初音、螢、野分、若菜上、若菜下、柏木、幻
大修館書店	新編 古典 改訂版	平成21年4月	桐壺、若紫
	精選 古典 改訂版	平成21年4月	桐壺、若紫、葵、須磨、若菜上、御法
	古典1 改訂版	平成21年4月	桐壺、若紫
	古典2 改訂版	平成21年4月	桐壺、葵、須磨、薄雲、若菜上、御法、橋姫
三省堂	高等学校 古典講読 源氏物語枕草子大鏡	平成21年3月	桐壺、夕顔、若菜、紅葉賀、葵、須磨、明石、薄雲、藤裏葉、若菜上、柏木、幻、浮舟、夢浮橋

出版社名	教科書名	出版年月	取り扱い巻
三省堂	高等学校 古典 古文編	平成21年3月	桐壺、若紫、須磨、御法、幻
教育出版	古典名文選	平成21年1月	桐壺、若紫、滯標、薄雲、野分、若菜上、御法、幻
	精選古典 古文	平成21年1月	桐壺、葵、須磨、薄雲、若菜上、御法
	新版 古典	平成21年1月	桐壺、帚木、花宴、葵、薄雲、若菜上、御法
筑摩書房	新編 古典	平成21年1月	桐壺、若紫、薄雲、御法
	物語・史伝選 古典講読 [古文・漢文]	平成21年1月	桐壺、夕顔、葵、須磨、初音、若菜上、柏木、幻、 総角、浮舟
	物語・評論選 古典講読 [古文]	平成21年1月	桐壺、須磨、薄雲、初音、若菜上、柏木、御法、 総角、浮舟
	古典	平成21年1月	桐壺、若紫、薄雲、若菜上、御法
明治書院	精選古典	平成16年1月	桐壺、若紫
	新精選古典	平成21年1月	桐壺、若紫
	精選 古典講読 (古文)	平成21年1月	桐壺、夕顔、若紫、花宴、須磨、薄雲、若菜上、 御法、幻、橋姫、浮舟
桐原書店	展開 国語Ⅱ	平成14年2月	桐壺、若紫
	高等学校 古典(古文編) 改訂版	平成21年2月	桐壺、若紫、葵、若菜上、浮舟
右文書院	古典Ⅱ	平成14年4月	葵、賢木、野分、御法
	平安文学選－物語 和歌 随想・日記－	平成20年4月	桐壺、葵、賢木、滯標、薄雲、野分、御法
	新編 古典講読 物語・ 小説 評論 漢詩・思想 史伝	平成21年4月	桐壺、夕顔、若紫、須磨、御法、夢浮橋
	源氏物語・大鏡・評論	平成21年4月	桐壺、夕顔、若紫、須磨、明石、玉鬘、螢、野分、 御法、東屋、浮舟、夢浮橋
	新古典	平成21年4月	桐壺、夕顔、若紫、須磨
	古典	平成20年4月	桐壺、若紫、夕顔、葵、須磨、御法
数研出版	古典 古文編	平成20年12月	桐壺、若紫、須磨、明石、柏木、浮舟
尚学図書	新版 古典二 (古典Ⅱ)	平成14年1月	少女、野分、御法
角川書店	高等学校 古典Ⅱ	平成14年1月	若紫、須磨、朝顔、初音、若菜上、御法
日栄社	物語文学選－伊勢物語・ 大和物語・源氏物語・堤中 納言物語・大鏡・今鏡－	平成21年2月	桐壺、若紫、須磨、薄雲、若菜上、御法、橋姫、 浮舟、夢浮橋

以上、夕顔巻については計9つの教科書への採録が確認できた。これら9つの教科書を「光源氏と夕顔との出会いの場面を掲げるもの」、「なにがしの院にて怪異が起こり夕顔が亡くなる場面を掲げるもの」、「両方を掲げるもの」の3つに分類したものを、表2にまとめた。

表2 教科書における夕顔巻の扱われ方

採録場面	教科書名	出版社
光源氏と夕顔との出会いの場面を掲げるもの	古典	右文書院
なにがしの院にて怪異が起り夕顔が亡くなる場面を掲げるもの	改訂版高等学校 標準古典	第一学習社
	高等学校 古典講読 大鏡源氏物語史記	第一学習社
	物語・史伝選 古典講読 [古文・漢文]	筑摩書房
	新編 古典講読 物語・小説 評論 漢詩・思想 史伝	右文書院
	新古典	右文書院
両方を掲げるもの	高等学校 古典講読 源氏物語枕草子大鏡	三省堂
	精選 古典講読 (古文)	明治書院
	源氏物語・大鏡・評論	右文書院

このように、夕顔巻の一場面のみを取り上げる際には、なにがしの院にて怪異が起り夕顔が亡くなる場面が選択される傾向にある。一方、光源氏と夕顔との出会いの場面を単体で掲げるものは少なく、当該場面が扱われる際には、同時になにがしの院での怪異譚も掲げられていることがわかる。

次に、教科書の夕顔巻本文に付された「学習の手引き」などの課題でどのように扱われているかを検討する。

まず、第一学習社「改訂版高等学校 標準古典」では、「[「なにがしの院」の印象を、本文の描写からまとめてみよう。] また「隠していた光源氏の身分は、どのように明らかになっていったか、考えてみよう。」とある。謎に満ちた光源氏の身分に加え、なにがしの院の不気味さが夕顔巻の重要な要素ととらえられていると考えられる。

また、三省堂「高等学校 古典講読 大鏡源氏物語史記」では、「光源氏の行動と心情を、時間の経過に従ってまとめてみよう。」また「夕顔の急死にまつわる怪異的な雰囲気はどのように描かれているか、抜き出してみよう。」とある。光源氏の心境、またこれに影響を与えたと考えられる怪異的な雰囲気に着目させることで、夕顔巻の大枠をとらえさせようとしたと考えられる。

さらに右文書院「源氏物語・大鏡・評論」では、「夕顔の宿はどのような様子であるか。また源氏は、それについてどう感じたか、話し合ってみよう。」また「[「なにがしの院」について夕顔はどう思ったか、またそれはどのような理由によると源氏は思ったか、説明してみよう。」とある。光源氏や夕顔の心情について本文中の記述を探し、説明や意見交換をさせることで、古文読解と話す力の双方を高めさせようとしたと考えられる。

以上、夕顔巻を取り上げている教科書を分析すると、概ね学習の手引きなどでは当該巻での光源氏の心境を把握することや、怪異的な雰囲気を読み取ることが求められており、これを通して登場人物の心情などを客観的に読み取る力を身に付けさせることが授業内の活動として想定されていることがわかる。これに対し、心情以外の、夕顔巻を展開していくうえでの前提となってい

る歴史的背景や文学史的な事項などは注として補われているのみである。

3、光源氏と夕顔の出会いの場面に関する検討

ここからは、教科書に掲げられている場面について、特に古注釈書を援用することで史実や、過去の『源氏物語』享受の営みを古典の授業実践の場に活かすための方途について検討していく。

三省堂や明治書院・右文書院の教科書では、光源氏と夕顔との出会いの場面が取り上げられている。とりわけ、三省堂では、八月十五夜に光源氏が病気の乳母を見舞った際に、隣家の夕顔と知り合い、その人柄に惹かれていく過程が掲げられている。また、夕顔巻本文に先立ち、当該場面に至る前提となっている帚木巻のいわゆる雨夜の品定め場面について次のように記されている。

十七歳になった光源氏は、ある五月雨の夜に、宮中で友人たちと交わした女性論(「雨夜の品定め」)で、中流階級の女性への関心をかきたてられた。⁽⁴⁾

雨夜の品定めにおいて、中流階級の女性に関する言及がなされている箇所は、次のとおりである。

受領といひて、他の国の事にかかづらひ営みて、品定まりたる中にも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ選り出でつべきころほひなり。なまなまの上達部よりも、非参議の四位どもの、世のおほえ口惜しからず、もとの根ざしいやしからぬ、やすらかに身をもてなしふるまひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬことなど、はた、なかめるままに、省かずまばゆきまでもてかしづけるむすめなどの、おとしめがたく生ひ出づるもあまたあるべし。宮仕へに出で立ちて、思ひかけぬ幸ひとり出づる例ども多かりかし」など言へば、⁽⁵⁾

頭中将により傍線部のように、上流階級でなくともうまく娘を教育し、中流階級であっても上の品といえる娘をもつ例も多くあると述べられている。

こうした女性談義を下敷きとして、夕顔巻では夕顔に対する評価が次のように語られている。

かの、下が下と人の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも、思ひのほか口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。⁽⁶⁾

住まいは下の下に属するものと人々に言われるような所でも、そんな所から意外な趣のある女を見つけ出すことがあればうれしいに違いない、というものである。光源氏はこれ以前に行った女性談義に対応する形で、夕顔を発掘したと判断できる。

また、光源氏が実際に夕顔に会った際の様子について、次のように述べられている。

白き裕、薄色のなよよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、そこととりたててすぐれたることもなけれど、細やかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひあな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。⁽⁷⁾

傍線部のように、夕顔について、取り立てて優れた所はないが、か細くしなやかな感じであると評価されており、夕顔には下層の階級かつか細い女性としての枠組みが与えられているのである。三省堂の教科書でも、帯木巻を概観したうえで夕顔巻の読解に移ることで、以上に述べた夕顔を取り巻く構図に、学習者の視点を向けさせようとしているのではないか。

教科書が掲げる箇所は、夕顔のわびしい住まいに注目が集まる場面ではあるが、夕顔の生い立ちについて、光源氏の側近である右近の口を通して次のような事が明かされている。

親たちははや亡せたまひにき。三位中将となん聞こえし。いとらうたきものに思ひきこえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさを思すめりしに、命さへたへたまはずなりにし後、はかなきものたよりにて、頭中将なん、まだ少将にものしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿よりいと恐ろしきことの聞こえ参で来しに、もの怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへりし。⁽⁸⁾

傍線部のように、夕顔の父は三位中将であり家柄は悪いとはいえない。なお、転居の経緯について、夕顔はもともと頭中将の愛人であり二人の間には一人娘の玉鬘をもうけているが、その事実は正妻である右大臣の四の君の知るところとなり、脅迫を受けたために、一時的に乳母がいる西の京の住まいに移ったというものである。京の仮住まいにおいても、光源氏が来訪した際に応対した女房の存在もあり、夕顔の身の回りには女房や女童が多く置かれていることがわかる。

このように、教科書では夕顔の住まいのわびしさと夕顔自身のはかなさが結び付けられているが、あくまで一時的に五条の乳母の屋敷に身を寄せたにすぎず、夕顔の人物像としてはかなさ以外の要素を見出すことも可能であると考えられる。

実際に、夕顔につきまとうはかなさのイメージとは反対に、たくましい女性としての印象を受ける一場面もみられる。以下は、帯木巻で頭中将を通して語られる言葉である。

さるうきことやあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息なをもせで久しくはべりしに、むげに思ひしをれて、心細かりければ、幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりしとて涙ぐみたり。

「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露（中略）」

うち払う袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり⁽⁹⁾

頭中將によって放置されていた夕顔が、撫子の花を折って頭中將に二度も手紙を寄せたのである。この時期は、頭中將の正妻である右大臣の四の君からの脅迫もあり、娘も幼かったために、どうにか頭中將の関心を繋ぎとめることで自身や娘の身を守りたいと考えたのではなかろうか。こうした事項を合わせると、夕顔の人物像として従来言われるはかなさとは逆に、たくましい女性や母としての姿をみることができよう。

三省堂の教科書の学習の手引きでは、「夕顔の住まいの特徴を整理し、光源氏がそれをどのように感じているかをまとめてみよう。」「夕顔は光源氏の目にどのように映っているか、抜き出してみよう。」のように提示されている。教科書では、あくまで光源氏の目に映る夕顔像をとらえることが求められていることがわかる。17歳の光源氏が感じる、夕顔に対するはかなさに共感しつつ読み味わうことが求められているものと考えられる。

以上のような、夕顔の人生をとりまく背景を考えると、夕顔は必ずしもはかない女性とはいえないと判断できる。むしろ『源氏物語』全体を通して明らかになる夕顔像としては、厳しい人世をたくましく渡ってきた人物像をみる事が可能である。

4、夕顔が物の怪に取り付かれる場面に関する検討

三省堂や第一学習社の教科書では、夕顔が物の怪に取り付かれる場面を掲げている。光源氏と夕顔が出会う場面よりもこちらを取り上げる教科書が多い。教科書は、当該場面からいかなる情景を読み取らせようとしているのだろうか。

まず、当該場面につけられた表題に注目したい。三省堂は、当該場面に「廢院の怪」という題をつけている。第一学習社や右文書院の表題にも「廢院」が登場しており、多くの教科書が、夕顔が連れ出された先である廢院に目を向けていることがわかる。

当該場面における廢院とは、源融の旧邸六条河原院がモデルとされる。これについて、四辻善成著『河海抄』⁽¹⁰⁾には次のように記されている。

なにかしの院

河原院歟。

五条よりそのわたりちかきなにかしの院とあれば也。六条坊門万里小路坊門南万里小路東相叶京極御息所先縦歟。彼院左大臣融公旧宅也。

河原院には、古くからもののけの伝説が存する。『河海抄』以前に成立した注釈書である素寂著『紫明抄』⁽¹¹⁾には、次のような源融に関する逸話が記されている。

そのわたりちかきなにかしの院におはしつきてあつかりめしいつ

問、其院何所哉

答、其院若河原院敷六条坊門万里小路也。昔、寛平法皇、本院のおと、時平公の御むすめ京極御息所とひとつ御車にて月のおもしろかりける夜、河原院に御ゆきなりて、かうらんのほこきに御車のなかえをうちかけておりさせ給て、もろともに月をなかめておはましけるほとに、うちよりもの、けはひして御息所をとりてひきいれてたてまつるに、法皇おとろきていたきと、め給て、なにもものなれはかくは、ととひ給に、融丸か候そかし、とてうちすてたてまつりけれと、御いのちはたえにけり、融の大臣彼院に執心ふかくして亡魂と、まりて望郷鬼となりけるにや、これらを思に、河原院をそらおほめきになにかしの院といふにやとそおほゆる

宇多法皇が河原院の庭で京極御息所と月を眺めていると、融の幽霊が現れ、御息所を河原院の中に引きずり込もうとしたため、法皇は必死に御息所を掴み引っ張り返すと、御息所は離されたが、すでに御息所の息はなかったというものである。

このように、河原院は源融の逸話と絡めて女性の命が失われる場所として、古来より有名だったと考えられる。

こうした背景により、夕顔の命を奪った物の怪の正体については、古くから二つの説が対立してきた。

第1は、廃院に住む妖物説である。先に掲げた『紫明抄』本文では、夕顔巻と同種の逸話が掲げられており、女性が河原院に赴いて命を奪われるという話が既に人々の間で認知されていたことがわかる。

幽霊として人々に恐れられている源融は、どのような人物なのだろうか。著名な逸話としては、元慶8(884)年に、陽成天皇の譲位によって皇嗣を巡る論争が起きた際の話が『大鏡』⁽¹²⁾ 基経伝にみられる。

陽成院おりさせたまふべき陣定にさぶらはせたまふ。融のおとど、左大臣にてやむごとなくて、位につかせたまはむ御心ふかくて、大臣にてやむごとなくて、位につかせたまはむ御心ふかくて、「いかがは。近き皇胤をたつねば、融らもはべるは」と言ひ出でたまへるを、このおとどこそ、「皇胤なれど、姓たまはりて、ただ人にて仕へて、位につきたる例やある」と申し出でたまへれ。さもあることなれど、このおとどの定めによりて、小松の帝は位につかせたまへるなり。

自分も皇胤の一人なのだから皇位継承者の候補に入るべきであると主張したが、源氏として臣籍降下した後に即位した例はないとして、藤原基経によって退けられたというものである。このように、源融は現世に恨みを残して亡くなった人物ということができる。

平安期にこうした話が人々の話題に上っていたのだとすると、夕顔巻で河原院を想起させる場所が登場した段階で、夕顔の運命は鬼に取り殺されるものとして想定できるものとなっていたと考えられる。

実際に源融の幽霊が出現したという説話が、『宇治拾遺物語』⁽¹³⁾ にみられる。

今は昔、河原院は融の左大臣の家なり。陸奥の塩釜の形をつくりて、潮を汲み寄せて、塩を焼かせなど、さまざまのをかしき事を尽くして住み給ひける。大臣失せて後、宇多院には奉りたるなり。延喜の御門、たびたび行幸ありけり。

まだ院の住ませ給ひける折に、夜中ばかりに、西の対の塗籠を開けて、そよめきて人の参るやうにおぼされければ、見させ給へば、日の装束うるはしくしたる人の、太刀はき、笏取りて、二間ばかりのきて、かしこまりて居たり。「あれは誰ぞ」と問はせ給へば、「この主に候ふ翁なり」と申す。「融の大臣か」と問はせ給へば、「しかに候ふ」と申す。「さは何ぞ」と仰せらるれば、「家なれば住み候ふに、おはしますがかたじけなく、所せく候ふなり。いかが仕るべからん」と申せば、「それはいと異様のことなり。故大臣の子孫の、我に取らせたれば、住むにこそあれ。わが押し取りてゐたらばこそあらめ、礼も知らず、いかにかくは恨むるぞ」と高やかに仰せられければ、かい消つやうに失せぬ。

その折の人々「なほ、御門はかたことにおはしますものなり。ただの人は、その大臣に会ひて、さやうにすくよかには言ひてんや」とぞ言ひける。

融左大臣の没後、河原院は宇多院に献上されるが、ある日の夜中、西の対屋から立派に正装して太刀を帯び笏を持った源融がやってくる。宇多院から少し離れたところに座った融は、自分の屋敷に宇多院がいることへの苦情を言う。しかし、この屋敷は融が亡くなった後その子孫が宇多院に献上したものであるため、宇多院は融を一喝した。すると融の亡霊はかき消すように消えてしまったというものである。

このように、融の霊はすでに人手に渡ってしまった屋敷であっても自分の所有物と認識しており、永く屋敷に取り付いて誰かが自分の屋敷に来ることに拒否感を表しているといえる。そのため、河原院という場所につく妖物が源融と認識されていたと考えることができ、『源氏物語』中においても、廢院の妖物のくだりは、源融の幽霊がもとになったと考えられる。

物の怪の正体に関する第2の説は、六条御息所の生霊とする説である。一条兼良著『花鳥余情』をはじめ、後の古注釈では主流とされている説で、注記は次のとおりである。

あまり心ふかくみる人くるしき御もてなし

これは六条御息所の事也。源氏の君の思ひくらへ給へるによりて邪気になれるにや。⁽¹⁴⁾

光源氏が、六条御息所と夕顔を比較しているために、嫉妬から六条御息所が邪気となったと判断されている。

六条御息所が生霊となった事例としては、葵巻などを掲げることができる。

まださるべきほどにもあらずと皆人もたゆみたまへるに、にはかに御気色ありてなやみたまへば、いとどしき御祈禱数を尽くしてせさせたまへれど、例の執念き御物の怪一つさらに動かず、やむごとなき験者ども、めづらかなりともて悩む。(中略)

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま

とのたまふ声、けはひ、その人にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。⁽¹⁵⁾

身重の葵の上を苦しめる生霊の正体を探ろうと、高位の験者に祈祷をさせるが、葵の上は重篤な状態となってしまう。そうした状況が続いたある日、祈祷の甲斐あり、ついに六条御息所の生霊が姿を現す。

当該場面では、六条御息所は葵の上が光源氏の妻であることを認識しているのである。ところが、夕顔巻では、まだ六条御息所は夕顔の存在に気づいていない。

以上より、『源氏物語』としては、表面上は廃院の妖物による行為として物語を展開したものと考えられる。

当該場面の、教科書での取り上げられ方に着目してみると、明治書院の『精選 古典講読（古文）』の「研究」では、「夕顔の様子はどのように描かれているか、また、それによって夕顔の死がどのようなものと感じられるか、考えてみよう。」と記されている。夕顔の死去の原因について読み取らせようとしていることがわかる。教科書では、17歳の光源氏が感じた得体のしれない恐怖に注目させることに目的がおかれているといえる。

5、おわりに

以上、本稿では、高等学校古典の教科書にみられる『源氏物語』夕顔巻を検討対象として、特に光源氏と夕顔との出会いの場面およびながしの院にて怪異が起これ夕顔が亡くなる場面を取り上げ、史実や准拠を授業における読解に含めることの意味について検討してきた。

夕顔巻を取り上げている教科書を分析すると、光源氏の心境を把握することや、怪異的な雰囲気を読み取ることが求められており、これを通して登場人物の心情などを客観的に読み取る力を身に付けさせることを目的としていると考えられる。

夕顔巻の光源氏と夕顔の出会いの場面について検討すると、教科書では、光源氏から見た夕顔像に共感しつつ読み味わうことが求められている。一方、注釈書などを通して夕顔の人生をとりまく背景を考えると、夕顔は必ずしもはかない女性とはいえ、むしろたくましさを見ることが可能である。

また、夕顔が物の怪に取り付かれる場面について検討すると、教科書では、夕顔の死去の原因について読み取らせようとしていることがわかる。一方、注釈書などを通して六条御息所と夕顔を比較しているために、嫉妬から六条御息所が邪気となったと判断されているのである。

このように、現在の教科書では、本文を根拠として登場人物の心情を読み取り考えることが求められているが、歴史史料や注釈書などを基にした准拠を読解に含めることで、多角的な視点をもって『源氏物語』を読み解くことのおもしろさや、多様な本文解釈の仕方を考える機会を与えることが可能となり、より深みのある授業が展開できるのではないかと考える。

【注】

- (1) 阿部秋生氏、秋山虔氏、今井源衛氏、鈴木日出男氏校注・訳 新編日本古典文学全集『源氏物語1』(小学館、2017年1月)
- (2) 注1に同じ。
- (3) 小川満江氏著「〈心〉をたどる源氏物語の授業(1) -夕顔巻の場合-」(『国語教育研究』61、2020年3月)
- (4) 三省堂『高等学校 古典講読 源氏物語枕草子大鏡』(三省堂、2009年3月)
- (5) 阿部秋生氏、秋山虔氏、今井源衛氏、鈴木日出男氏校注・訳 新編日本古典文学全集20『源氏物語1』(小学館、2017年1月、59頁)
- (6) 注5に同じ。144頁
- (7) 注5に同じ。157頁
- (8) 注5に同じ。186頁
- (9) 注5に同じ。82~83頁
- (10) 玉上琢彌氏編、山本利達氏、石田穰二氏校訂『紫明抄・河海抄』(角川書店、1978年8月)
- (11) 注10に同じ。
- (12) 橘健二氏、加藤静子氏校注・訳 新編日本古典文学全集34『大鏡』(小学館、1996年6月)
- (13) 小林保治氏、増古和子氏校注・訳 新編日本古典文学全集50『宇治拾遺物語』(小学館、2013年12月)
- (14) 中野幸一氏編 源氏物語古註釈叢刊 第二巻『花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々 源語秘訣 口伝抄』(武蔵野書院、1978年12月)
- (15) 注1に同じ。

(2023年10月12日受理)